

金色夜叉

續編

續編

金色夜叉

續編

明治三十五年四月廿五日印刷
同 年四月廿八日發行



著 者

尾崎德太郎

發行者

和 田 武 光

印刷者

齋 藤 章 達

發行所

春 陽 堂

印刷所

東京印刷株式會社

電話浪花二千三百二十五番

金色夜叉續篇

實價金五拾錢

與紅葉山人書

學海居士

紅葉山人足下。僕幼嗜讀稗史小說。當時行於世者。京傳三馬一九。及曲亭柳亭春水數輩。雖有文辭之巧麗。構思之妙絕。多是舐古人之糟粕。拾兔園之殘簡。聊以加己意焉耳。獨曲亭柳亭二子較之餘子。學問該博。熟慣典故。所謂換骨奪胎。頗有可觀者。如八犬弓張俠客

傳。及田舍源氏諸國物語類是也。然在當時。讀此等書者。不過閭巷少年。畧識文字。間有涉獵史傳者。識見淺薄。不足以判其巧拙良否焉。而文學之士。斥爲鄙猥。爲害風素俗。禁子弟不得縱讀。其風習可以見矣。年二十一二。稍讀水滸西遊金瓶三國紅樓諸書。兼及我源語竹取字津保俊蔭等書。乃知稗史小說亦文學之一途。不必止游戲也。而所最

喜。在水滸金瓶紅樓。及源語。能盡人情之隱微。世態之曲折。用筆周到。運思巧緻。而源氏之能描性情。文雅而思深。金瓶之能寫人品。筆密而心細。蓋千古無比也。近時小說大行。少好文辭者。莫不爭先攘臂其間。然率不過陋巷之談。鄙夫之事。至大手筆如金瓶源氏等者。寥乎無聞何也。僕及讀足下所著諸書。所謂細心邃思者。知不使古人專美於上。

矣。多情多恨。金色夜叉類。殆與金瓶源語相似。僕反覆熟讀。不能置也。惜範圍狹。而事跡微。地位卑。而思想偏。未足以展布足下之大才矣。盍借一大幻境。以運思馳筆。必有大可觀者。僕老矣。若得足下之一大著述。快讀之。是一生之願也。足下以何如。

續
篇 金色夜叉

紅葉山人

(壹)

時を錢なりとして之を換算せば、一秒を一毛に見積りて、壹人前の睡量凡そ八時間を除きたる一日の正味十六時間は、實に金五圓七拾六錢に相當す。之を三百六十五日の一年に合計すれば、金貳千壹百〇貳圓四拾錢の巨額に上るにあらずや。然れば茲に廿七日と推薄りたる歲末の市中は物情洵々として、世界絶滅の期の終に宣告せられたらんも、恁やとばかりに、坐りし人は出でゝ歩み、歩みし人は走りて過ぎ、走りし人は足も空に、合ふさ離るさの氣立ましく、肩相摩しては傷き、穀相擊ちて

は碎けぬべきをも覺えざるは心々に今を限と慌て騒ぐ事ありて、不狂人も狂せるなり。彼等は皆過去の十一箇月を虚に送りて、一秒の塵の積める貳千餘圓の大金を何處にか振落し、後悔の尾に立ちて今更の血眼を瞪き草を分け瓦を撥しても、其の行方を尋ねんと爲るにあらざるなし。恚る間にも常は止一毛に値する一秒の壹錢乃至拾錢にも暴騰せる貴々重々の時は、速射砲を連發にするが如く飛過るにぞ、彼等の恐慌は更に意言も及ばざるなる。

其の平生に怠無かりし天は、又今日に何の變易もあらず、悠々として蒼く昭々として闊く、浩浩として靜に而も確然として其の覆ふべきを覆ひ終日北の風を下し、夕付く日の影を耀して、師走の塵の表に高く澄めり。見廻せば兩行の門飾は一様に枝葉の末廣く壽山の翠を交し、十町の軒端に續く注連繩は福

海の震揺曳して、繁華を添ふる春待つ景色は、轉た舊り行く歳の魂を驚かす。

彼の人々の貳千餘圓を失ひて馳違ふ中を、梅提げて通るは誰が子、獵銃擔げ行くは誰が子、妓と車を同うするは誰が子、啣楊枝して好き衣着たるは誰が子、或は二頭立の馬車を驅る者、結納の品々担する者、雜誌など讀みもて行く者、五人の子を珠數繫にして勸工場に入る者、彼等は各若干の得たる所有りて、如此く自ら足れりと爲るにかあらん。此等の少く失へる者は喜び、彼等の多く失へる輩は憂ひ、又希には全く失はざりし人の樂めるも、皆内には齟齬として盈てるは虧けじ、虧けるは盈たんと孰か其の求むる所に急ならざるはあらず。人の世は三の朝より花の晝、月の夕にも其の思の外はあらざれど、勇怯は死地に入りて始めて明なる年の關を、物の數とも爲ざらんほどを

目にも見よとや、空^{から}臙^{すね}の醉^{ちび}を踏^ふみ、鐵^{てつ}鞭^{べん}を曳^ひき、一卷^{いちくわん}のブックを
 懷^{ふく}にして、嘉^か平^{へい}治^ち平^{へい}の袴^{はかま}の焼^や海^{かい}苔^{けい}を綴^{つづ}れる如^{ごと}きを穿^うち、フラチ
 ルの浴^ゆ衣^{かた}の洗^{あら}曬^{いさら}して垢^{あか}染^{ぞめ}にしたるに、文^{ぶん}目^めも分^わかぬ木^も綿^{めん}綿^{めん}の
 布^{ぬの}子を襲^{かこ}ねて、ジオンソン帽^{ぼう}の瓦^{かはら}色^{いろ}に化^はけたるを頂^{いた}き、焦^こ茶^{ちや}地^ち
 の編^{しら}羅^ら紗^{しゃ}の二^に重^{ちゆう}外^は套^しは何^いの冬^{ふゆ}誰^たが不^ふ用^{よう}をや讓^{ゆづ}られけん尋^な常^{じょう}
 よりは寸^{すん}の薄^{はく}りたるを、身^み材^{ざい}の人^{ひと}より豊^{ゆた}なるに絡^かひたれば、例^{れい}
 の袴^{はかま}は風^{かぜ}にや吹^ふ斷^{ちぎ}れんと危^{あや}くも閃^{ひらめ}きつゝ、其^{その}人^{ひと}は齡^よ三^{さん}十六^{じゅうろく}七^{しち}
 と見^みわて、形^{かたち}癰^やせたりとにはあらねど、寒^{かん}樹^{じゆ}の夕^{ゆふ}空^{ぞら}に倚^よりて孤^こ
 なる風^{ふう}情^{せい}、獨^{ひとり}り負^おふ氣^け無^く麗^{うるは}しくも富^とめる髭^{ひげ}は、下^{した}には乳^ちの
 邊^{あたり}まで毳^{さん}々と垂^たれて、左^さ右^うに拈^ねりたるは八字^{はつじ}の蔓^{つる}を卷^まきて耳^{みみ}
 の根^ねにも迨^{およ}びぬ。打^{うち}見^みれば面^{めん}目^め爽^{さやか}に、稍^{やや}傲^{をこ}れる色^{いろ}有^あれど峻^{さか}しく
 はあらず、而^{しか}も今^{いま}陶^{たう}々^く然^{ぜん}として酒^{しゆ}興^{きやう}を發^はつ、春^{はる}の日^ひ長^{なが}の野^の邊^べを
 迎^{むか}ふらんやうに、西^{にし}筋^{すぢ}の横^{よこ}町^{まち}を此^{この}大^{おほ}路^ろに出^いで來^きらんとす。

「瓢空しく夜は静にして高樓に上り、酒を買ひ、簾を卷き、月を邀へて酔ひ、醉中劍を拂へば光月を射る、」

彼は節をかしく微吟を放ちて、行く／＼且樂むに似たり。打晴れたる空は琉璃色に夕榮えて、俄に互え勝る賊の目口に沁みて磨鍼を打つらんやうなるに、烈火の如き醉顔を差付けては太息噓いて、右に一步左に一步と躡きつゝ、

「往々悲歌して獨り流涕す、君山を剗却して湘水平に、桂樹を砍却して月更に明ならんを、丈夫志有りて……」

と唱ひ出づる時、一隊の近衛騎兵は南頭に馬を疾めて、眞一字に行手を横斷するに會ひければ、彼は鐵鞭を植て、舞立つ砂煙の中に魁の花と装へる健兒の參差として推行く後影をば壯なる哉と謂まほしげに見送りて、

「我四方に遊びて意を得ず、陽狂して藥を施す成都の市、」

と漫に其詩の首をば小聲朗に吟じ居たり。さては往來の遠き
目も皆牽れて此の節季の修羅場を獨天下に吃ひ酔へるは、何
者の暢氣か自棄か豪傑か悟か酔生兒かと異しき姿を見て過
る有れば面を識らんと窺ふ有り、又は其の身の上など思ひつ
ゝ行くも有り。彼は太く酔へれば總て知らず、町の殷賑を眺め
遣りて、何方を指して行かんとも心定らず姑く立てるなりけ
り。

然ばかり人に怪しまるれど、彼は今日のみ此町に姿を顯した
るにあらず、折々散歩すらんやうに出来ることあれど、箇様の
醉態を認むるは、兼て注目せる派出所の巡查も希むと思へる
なり。

旋て彼は鐵鞭を曳鳴して大路を右に出でしが、二町許も行き
て、乾の方より狭き坂道の開きたる角に來にける途端に、風を

帯びて馳下りたる俚は、生憎其方に躡ける酔客の、嫌の邊をひと衝撞てたりければ、彼は卻合を打つて二間も彼方へ撥飛さるゝと齊しく、大地に横面擦つて僵れたり。不思議にも無難に踏留りし車夫は、此の危忽に氣を奪れて立ちたりしが、面倒なる敵手と見たりけん、そのまゝ轆を回して逃れんとするを、俚の上なる黒綾の吾妻コオト着て、素鼠縮緬の頭巾被れる婦人は、棒色無地の絹臘虎の膝掛を推除けて、駐めよ返せと悶ふるを、猶聽かで曳々と挽き行く後より、

「待て、こちら！」と喝する聲に、行く人の始て事有りと覺れるも多く、はや車夫の不情を尤むる語も聞ゆるに、耐りかねたる婦人は、強て其處に下車して返し來りぬ。

例の物見高き町中なりければ、此の忙しき際をも忘れて、寄來る人數は、蟻の甘きを探りたるやうに、一面には遭難者の土に

踞へる周邊を擁む、一面には婦人の左右に傍ひて、目に物見んと揉立てたり。婦人は途を來つゝ被物を取りぬ。紋羽二重の小豆鹿子の手絡したる圓髻に、鼈甲脚の金七寶の玉の後簪を斜に、高蒔繪の政子櫛を翳して、粧は實に塵をも怯れぬべき人の謂ひ知らず思惑へるを、可痛の嵐に堪へぬ花の顔や、と群集は自ら聲を歛めて肝に徹ふるなりき。

いと更に面の裏まほしき此塲を、頭巾脱ぎたる彼の可羞さ、と切なさとは幾許なりけん。打蕨めたる顔は措き所あらぬやうに、人堵の内を急足に辿りたり。帽子も鐵鞭も、懷にせしブツクも、薩摩下駄の隻も投散されたる中に、醉客は半ば身を擡げて血を流せる右の高頬を平手に掩ひつゝ、寄來る婦人を打見遣りつ。彼は其の前に先づ懦れず會釋して、

「どうも取んだ龜相を致しまして、何とも相濟みませんでござ

います。おや、お顔を！お目を打ちましたか、まあ、奈何も……。」

「いや、太した事は無いのです。」

「然やうでございますか。何處ぞお痛め遊ばしましたでございませう。」

腰を得立てず居るを、婦人は仍ほ氣遣へるなり。

車夫は數次腰を屈めて主人の後方より進出でけるが、

「どうも、旦那誠に申譯もございません、どうも、まあ平に御勘辨を願ひます。」

眼を其方に轉じたる酔客は悲れるとしもなけれど、聲肅に、

「貴様は善くないぞ。兎相を爲たと思うたら何爲車を駐めん。逃げやうとするから呼止めたんじや。貴様の不心得から主人にも恥を搔する、」

「へい、恐入りました。」

「どうぞ御勘辨あそばしまして。」

俤の主の身を下して辭を添ふれば、彼も打顔きて、

「以來氣を着けいよ。」

「へい………へい。」

「早う行け、行け。」

やをら彼は起たんとすなり。さては望外なる主従の喜に引易
へて見物の飽氣無さは更に望外なりき。彼等は幕の開かぬ芝
居に會へる想して餘に落着の蛇尾振はざるを悔みて、はや忙
々しき踵を回すも多かりけれど、又見榮ある此場の模様にな
残を惜みつゝ去り敢へぬもありけり。
車夫は起ち惱める醉客を扶けて履物を拾ひ、鞭を拾ひて宛行
へば、主人は帽を清め、ブツクを取上げて彼に返し、頭巾を車夫
に與へて懇に外套、袴の泥を拂はしめぬ。免されし罪は消ぬぬ